

再生に向けて

三角 千晶

およそ集団生活を始めた時からいじめられていた。幼稚園の頃は、すぐに風邪を引いて休む虚弱児だったので、時たまにしか行けなかったが、行くと帰り道で草の穂を投げつけられ、ちくちくして痛かった。いつもどうやってかわして家に帰ろうかと悩んでいた。まあ今思えば無理もなかったかもしれない。時たまに園に行っている時には、大概部屋の隅で絵本を広げている大人しくて人見知りの激しい引っ込み思案な子だったから。

小二の時に父の転勤に伴って転校した。小一の時とは違い大規模校——いわゆるマンモス校で、一学年十クラスはある学校だった。そして小二のクラスは、基本的に小一のクラスの持ち上がりで、既に友達のグループがいくつもできていた。転校生の多い小学校だったが、それでも誰かと友達になろうと思うと、積極的にその友達グループのどれかと接触しなければならなかった。たとえ弾かれたとしても、めげずに割り込む必要があった。しかし私には、そこまでの元気はなかった。自然に孤立していた。それもいけなかったのだろう。小三になってクラスの中身は変わったが、いじめが始まった。私は、ほとんど生まれたころからアレルギー性鼻炎で、幼稚園生の頃から蓄膿症だったので、その頃も当然、始終青洩をたらしていた。これが余計にいけなかった。山ほどのティッシュペーパーで拭いても拭いても出てくる青洩。皆は汚いと言った。汚いのは、いつのまにか私そのものになっていた。先生は放置した。のみならず、ある日突然「いじめられるのは、あなたが悪い。」とだけ言っつて、私の言い分を聞くことしなかった。いじめはエスカレートした。汚い、腐る——一日中そんな風に言われ、バイキンかゴキブリ並みに避けられ、いやな顔をされた。いじめに加わらない人達もいたが、全く無関心だった。先生は放置し続けた。

小五の時には、もう自分で自分が支えられず、前も後ろも真っ暗闇の中にいるようだった。汚い、腐るとい言葉、いじめられるほうが悪いというかつての先生の言葉が心に刺さり続けていた。母には話したが、ため息をつかれるだけだった。私

は壊れかけた。鬱屈した思いが外に出て爆発するタイプの人間ではなく、私はひたすら内に向かって自分が壊れるタイプだったので、実際、感情を失くし心が壊れたでくの坊になるのは時間の問題だった。けれど、この世でただ一人、私は悪くない、そのまま大好きだよと、実際の言葉にはならなかったが、懸命に確かにそんなメッセージを私に投げかけてくれた人が現れた。小五の時の担任の先生だった。先生の目はいつも私にあった。他の子のこともあるから、あまり特別なことはなかったが、先生の暖かな視線はいつも私にあった。おかげで私は生きる最後の力を得た。

家族はどうだったのかと言えば、兄弟もいるのだが、私とは性格、タイプなどがあまりに違いすぎて、何も言えなかった。母は打ち明けてもため息をつくだけ。父は仕事も忙しく、それに厳しくておっかない人でもあったので、相談するなど思ってもよらなかった。母以外、あまり私が相談しなかったできなかったせいもあるかもしれないが、私は親に愛されていないと長い間思うことになった。いじめが続くとなんだかイライラすることが増えたとし、どこかで親に慰めてもらいたかった気持ちがあったが、ストレートに求めることができず、叱られるようなことをして、やっぱり叱られた。学校には行きたくなかったが、これを言うとうちを追い出されかねないようにさえ思った。少なくとも父はそのぐらい厳しくて怖かったし、家で一番偉かった。父には不登校とか登校拒否とか、断じて許さなかったらうと、今でも思う。大人になると、自然と、親に愛されていないなかったわけでもなかったと思えた。家計は厳しかったはずだが、ピアノを習わせてくれたし、後には大学にも行かせてくれた。

それから当時、いじめは社会問題のなりかけで、関心のある先生自体がごくわずかだった。まして学校は関知せずだった。だから、あの小学校五年生当時の担任の先生一人では、既にエスカレートしたいじめは収まるはずもなく、以後、先生のようになんとかしたいという先生も学校もなかった。

いじめはまだエスカレートし続けた。中学校に行く頃には、いじめる人数が増え、私は名前も知らない顔もよくは知らない生徒からいじめられ続けた。授業中にさえ腐るといわれたが、気にする先生は誰もいなかった。たまのPTAや三者面談などで保護者が学校に来る日もあったが、その目の前で腐るといわれても、自分の子が言われたわけではなければ別に関心もないようだった。

高校生になった。家の都合でまた県外に引っ越した。それでやっといじめられな

なくなった。このころから私の蓄膿症もやっと自然と良くなり、ただの鼻炎になっていった。それまで鼻のことで病院にも長く通ったりしたが、全然良くならなかったのだ。そしてこの高校で、今に至る友人と出会う。いじめられることのない学校生活は、まあまあ楽しかった。けれど、別のことに悩み始めることになる。高校受験の時から感じていたことだが、勉強しなければと思ってもあまり勉強できない、異常によく眠る。病とは誰も思わなかったし私自身も思わなかったけれど、いつの間にかうつ病だった。当時は、うつ病という病のあることさえ、私も私の周囲も知らなかった。だから、自責の思いだけ膨らんだ。

大学には行きたかったので行かせてもらったが、何もできなくなる時や、全てを放り出して終わりにしたい衝動をこらえるのが大変だった。それでもなんとか卒業することができたのは、私が本当に幸せになることを願っていた小学五年生の頃の担任の先生のこと、いつも頭に浮かんだからだ。

普通の〇〇になった。人間が怖いということを実感した。まともに挨拶できなかった。色々誤解された。病はどんどん進んでいた。やがて二十歳代半ば頃、微熱が出て治まらなくなった。以前一度右足首をねん挫したところが、すっかり治ったはずなのに、時々痛むことも気になった。そこで心療内科に行った。けれど、今一つ納得しきれなかった。色々悩んで、精神科の看板もある別の病院に行った。うつ病とそこで初めて知った。もっとも医者先生は、最初からそう告げたわけでもなかったが、色々尋ねられて、どこか先生の言葉などに納得した。半年間ただ通って薬を幾種類かもらい続けた。これだけだったのに、先ずイライラして怒りやすい「性分」と思っていたことが治った。驚いた。そして半年後、もう自分一人で抱えていることもないんじゃないかと思えて、心の中に澱のようにたまったものを吐き出し始めた。「それで良くなってきたのですよ」という先生の言葉が忘れられない。それから私は後から後から少しづつ沢山——言う必要はなかったのではないかということまで話した。話して良かったことの一つに、道を歩いていて、見知らぬ他人の談笑が私を嘲笑っているように思えたことも、病と分かったことがある。「辛かったね」という先生の一言は忘れられない。家族のだれも気に留めてくれなかったことの一つだった。

やがて私はちよつとづつヤマアラシ状態からまともになっていった。主治医の先生と、小学五年生の頃の担任の先生、たった一人私のそばに残ってくれた高校時代

からの友人のおかげだった。この友人の他は、皆去った。私が無理してOT業を続けたことも足しになった。いろんなタイプの人がいっているんだ、いやむしろ積極的にそうでなくては、世の中は進まない。そんなことがわかって得心して、やっと自分を許せる思いだった。私が悪いとかつて言った先生を恨んだりもしていたが、長年かかって、仕方のないこととやっと恨む炎を消せた。

今、私は会社を辞め、仕事を小休止している。あんまり頑張りすぎて、かえって頭痛を起こしたことがきっかけだった。反りの合わない上司になり、出来そうもない仕事を押し付けられたこともきっかけだった。頑張りすぎとは、主治医の先生にも言われたことだ。頑張ることを止めると、ただ通院して横になるだけしかできなくなった。

そうして五年ほどたって、ようやくうつ病もあらかし治ろうとしている。肌の調子も二十歳代より良くなった。皿洗い、買い物、洗濯、草むしりや落ち葉掃き…：できることも少しずつ増えてきた。できる時間も増えてきた。

今こそ再生の時、生まれ変わったつもりで人生を再スタートさせたい。こうして書くことも一つのきっかけになれば幸いである。とりあえず、稼げる仕事を目指して勉強している。